

Title	「アルスター植民」再考：スコットランド系入植者のエスニシティ
Sub Title	Ulster Plantation' revisited
Author	松井, 清(Matsui, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.6 (2011. 6) ,p.127- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	十時巖周先生追悼論文集 論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110628-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110628-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「アルスター植民」再考

——スコットランド系入植者のエスニシティ——

松 井 清

はじめに

一 植民請負人

二 マイケル・ヒル論文

三 アルスターとスコットランド南西部

1 歴史

2 言語

3 農耕技術と民俗文化

4 宗教

四 若干の問題

結びにかえて

はじめに

一七世紀初頭の「アルスター植民」(Ulster Plantation)の評価については、今なお議論が続いているが、多く


の意見は、政治的な立場の違いを超えて、この植民事業が二〇世紀の初めにアイルランドを南北に分断させ、今日の北アイルランド紛争の遠因あるいは歴史的起点となったという点では一致しているようである。「伯爵の逃亡」として知られるゲール（ケルト系）封建領主の突然の海外逃亡によって没収されたアルスター中西部の広大な土地に、ジェイムズ一世（スコットランドではジェイムズ六世）が一六〇九年に国策として号令した植民事業には、イングランドとスコットランドから多数の借地農が入植し、当初のケルト系の先住者とアングロ・サクソン系の移住者という対比は、やがてカトリックとプロテスタントという宗教的対立という意味をともなう固定化し、今日の紛争の輪郭が出来上がったからである。

筆者は以前に、人口移動という関心から「アルスター植民」の問題を、とくにスコットランド系の入植者に焦点を当てて論じたことがあった。<sup>(1)</sup> 不十分な論述であったが、この人口移動という点では、前稿に多くをつけ加える必要はなさそうである。ただ、その後の文献的調査の中でスコットランド系入植者の「エスニック・オリジン」という問題を論じている歴史学者マイケル・ヒルの論文<sup>(2)</sup>を読む機会があった。この論文は「アルスター植民」の初期に問題を限定し、しかも後述のように、その論証には賛同できない点もあるのだが、筆者が迂闊にも見落としていた論点を提起していることは間違いない。以下では、ヒル論文の論点を敷衍する形で、この植民事業をとり上げ、前稿の不備を補足することを期している。

(1) 松井清「『アルスター植民』と居住分離の成立——一七世紀アルスターにおけるスコットランド系入植者——」明治学院論叢第六六〇号『社会学・社会福祉学研究』第一一〇号、二〇〇一年、五七—一一七頁。

(2) Hill, Michael, 'The Origins of the Scottish Plantations in Ulster to 1625: A Reinterpretation', *The Journal of British Studies*, vol.32, no.1, 1993, pp.24-43.

## 一 植民請負人

「アルスター植民」に二、三年先行して、アルスター東北部アントリム州南部とダウン州北部の開発はヒュー・モンゴメリー (Hugh Montgomery) とジェイムズ・ハミルトン (James Hamilton) というスコットランド南西部出身の人物に委ねられた。この二人の民間人による開発が順調に進んだこともあって、一六〇九年から始まる「アルスター植民」は、没収されたアルスター九州すべてを対象とはせず、 1でみるように、アントリムとダウンは除かれ、それに「降伏と再受封」(surrender and re-grant)の政策に基づきモナハンも、同地の氏族がゲール氏族の最後の反乱となった「九年戦争」に参加しなかったという理由などもあって除かれた。<sup>(1)</sup>

このように「アルスター植民」はアルスター内陸部の六州が舞台となったが、これら六州における耕作可能な良地の総面積は五〇万三四五八エーカー(イングリッシュ・エーカー)であり、「植民計画はこれを三二の「バロニー(男爵領)」(baronies or precincts)に分割し、さらに各バロニー内部をそれぞれ一〇〇〇、一五〇〇、二〇〇〇エーカーの総数二二一の「エステート(農園)」(estates or proportions)に細分し、これらを単位として、イギリス国王がつぎの三種のカテゴリーの人々に分与することにした」(松川、一九頁)。

イングランド人でアイルランド在住の「国王の従僕」(Servitor)とロンドンデリー州の開発を委託された「ロンドンのカンパニー」とともに、土地を分与されて植民事業の中核となったのは「植民請負人」(Under-takers)と呼ばれる人々であった。かれらは、イングランドとスコットランドの「諮問委員会」(Privy Council)が選抜し、全体の四分の一近くの土地を分与されている。<sup>(2)</sup>元軍人、法律家、行政官など、資金力のある中産階級出身者が多かったが、請負人となる資格はプロテスタント(国教徒)であること以外はとくに制約はなかった(Campbell: 10)。

図 1 スコットランド系植民請負人の入植地 (1609 年)



〈出典〉 Clarke, Aiden with R. Dudley Edwards, 'Pacification, plantation, and the catholic question, 1603-23' in Moody, T. W, F. X. Martin and F. J. Byrne (eds.) *A New History of Ireland III, Early Modern Ireland 1534-1691*, Oxford University Press, 1976, p.198 より作成。

かれらに課せられた条件はつぎのようなものであった。①地代として一〇〇〇エーカーにつき五ポンド六シリング八ペンスを王室に納入すること。②一〇〇〇エーカーにつき三〇〇エーカーは私有地 (demesne) となるが、残りの七〇〇エーカーには三年以内に一二〇エーカーを保有する永代借地農 (fee farmers) を二家族、一〇〇エーカーを保有する定期借地農 (leaseholders) を三家族、残りの一六〇エーカーには四家族以上の農夫 (husbandman)、職人 (artificer)、日雇農夫 (cottager) を入植させること。③二〇〇〇エーカーを譲与された者は三年以内に塁壁をめぐらせた囲い地 (bawn) のなかに石造の家屋を建築すること。④一五〇〇エーカーの請負人の場合はレンガ造りでもよく、一〇〇〇エーカーの場合は囲い地だけでもよい。⑤三年以内に一八歳以上の堅強な男性を——イングランド人でもアイルランド在住スコットランド人 (inland Scottish)

でもよい——を一〇〇〇エーカーにつき二四人、家族数でいうと最低一〇家族を入植させること。⑥借地農には防御上の理由から囲い地の周辺に家を建てさせるようにすること。⑦請負人は武器を保有し臨戦状態にしておくこと。⑧請負人は宗教的に国教徒であり、国王至上権を認め国王への忠誠を宣誓する者であること。⑨請負人は五年間アイルランドに在住するか代理人を住まわせること。⑩土地をアイルランド人や忠誠を宣誓しない者には譲渡してはならないこと、などである（松川、一九頁、Robinson, 1986: 63-64; Moody et al.: 197-200）。植民請負人のなかには各領域で一名例外的に三〇〇〇エーカーを分与された有力者もあったが、多くは二〇〇〇エーカーを超えないこととされた。請負人の農産物は七年間関税なしで輸出することができ、生活必需品は五年間無関税で輸入できることになっていた（Robinson, 1986: 63-64）。

入植者の移住は、「初めはゆっくり、その後弾みがつき、一七世を通じて持続した」（Gallay: 4）と指摘されるように、それが本格化するのは一七世紀後半になってであり、アルスター植民が始まった当初は入植者の数は予想外に少なかったようである。土地の分与と配分が完了し、一六一〇年代から一定数の借地農の来住が始まったが、その数は当初予期していたほどの人口量には達しなかった。

三年以内に一〇〇〇エーカーあたり最低二四人の男性（一〇家族に相当）という条件からすると、植民請負人は各自のエステートに計三九〇〇人のイギリス人男性を入植させねばならない、という勘定となり、一六一〇年代も後半になると入植者の数はしだいに増えていったようだが、この条件を満たすことのできた請負人は少なく、なかには、自分の土地を自分の目で検分する前にその開発特許権を売却する者、早くも自分の土地を他の請負人に譲渡してしまう者、入植者や家畜を渡来させる船代の負担を嫌ってイギリス本国からの入植者の導入をあきらめ、より高い地代を払うことを惜しまないアイルランド人を公然と雇用する者、なども現れている。

ほどなく当初の条件は修正を余儀なくされることになった。ジェイムズ一世とかれの政府は、請負人に課した

当初の「三年以内に入植を完了する」という条件を三年間延長して「一六一六年八月末まで」と変更せざるをえず、さらに一六一八年には「請負人のエステートからアイルランド人を排除する時期を一六一九年の五月とする」と発令せざるをえなかった。そして、さらなる最も重要な変更は、請負人の土地にアイルランド人の借地農の入植を認めるようにしたことであり、一六二二年に勅令が発せられ、「アイルランド人の借地農が請負人のエステートの四分の一までを占有することが許されることになった」(Robinson 1984: 65)。すでにロンドン・カンパニーが経営したロンドンデリー州などでは、土地をアイルランド人の地主に貸してしまう事態も起こっていたのである (Macafee: 73)。

このようにアルスター植民は当初から困難に直面し、イングランド系もスコットランド系もかなりの植民請負人が「一定数以上のイギリス人の家族や入植者を導入し、一定年数内に墨壁をめぐらせた囲い地のなかにレンガ造りまたは石造りの居城や家屋を建築する」といった条件はもちろん、上記の緩和された条件の達成さえ難しく、植民経営から撤退を余儀なくされたようである。一六一九年までにスコットランド人請負人の五九のエステートのうちの三三は所有者が変化していたとされ (Robinson, 1982: 80)、おそらく、同じような事態がイングランド系の請負人にも生じていたはずである。

このように、少なくとも初期に関するかぎり、かなりの植民請負人が失敗の憂き目を見ていたと言ってしまう間違いないのであるが、もちろん、なかには首尾よく当初の目的を達成した者も少なくない。そこには、さまざまな社会的要因あるいは個別的事情が介在しているであろうが、スコットランド人の植民請負人や入植者に関して、マケル・ヒル論文は、以下のように、かれらの出身地方やエスニシティの面から初期のスコットランド人入植者の成否の背景を論じている。つぎに、その概略を紹介しておこう。

(1) モナハンの場合は「降伏と再受封」(surrender and re-grant)の政策に基づいて、いったん没収した土地を、一五九一年に同地のパトリック・マッケナ(Patrick McKenna)らアイルランド封建貴族に再受封し、かれらが「伯爵の逃亡」に参加しなかったこともあってモナハンは「アルスター植民」から除外された。

(2) 六〇名のスコットランドの植民請負人が九つのバロニーでエステートを分与され、五三名のイングランド人の植民請負人が七つのバロニーでエステートを受領しているが、「植民請負人」「国王の従僕」「ロンドン市のカンパニー」以外にも、「アイルランド教会」や「トリニティ・カレッジ」、それに一部の「アイルランド地主」など、こうした人々や団体にも土地が与えられることになった。ロンドン市の一二のカンパニーが独占的に土地を獲得したロンドンデリー州を別にすれば、残りの五つの州(アーマー、テイロン、ファーマナ、ドニゴール、キャバン)における土地の内訳は、イングランド人の請負人二二%、スコットランド人の請負人二二%、教会関係(主教の土地、教会地 *bey land*、寺領地 *local glebes* など)二四%、イングランド人の従僕一三%、アイルランド地主一五%、トリニティ・カレッジなど三%、その他二%、という内訳である(Robinson, 1982: 26)。

なお、植民請負人には少数の「主」(chief)と多くの「副」(sub)の区別があり、パーシヴァル・マックスウェルによると、スコットランド系の請負人の場合では六〇名の内、「主」は九名、「副」は五一名であった(Perceval Maxwell: 368)。イングランド人の請負人と比べるスコットランドの請負人は、与えられたエステートの数は少し多かったが、エステートの規模はイングランド系よりも小さく、三〇〇〇エーカーが五名、二〇〇〇エーカーが七名、一五〇〇エーカーが一〇名、一〇〇〇エーカーが三七名前後であった(Robinson, 1984: 79)。

## 二一 マイケル・ヒル論文

計画の当初から、「ハイランド(高地)地方のスコットランド人はカトリック教徒であり国王への忠誠が危惧される」といった理由で入植者の対象から除外された。その結果、アルスター地方に移住したスコットランド人の植民請負人および借地農は、ローランド(低地)地方の出身者がほとんどであったが、ヒル論文は、ここでの

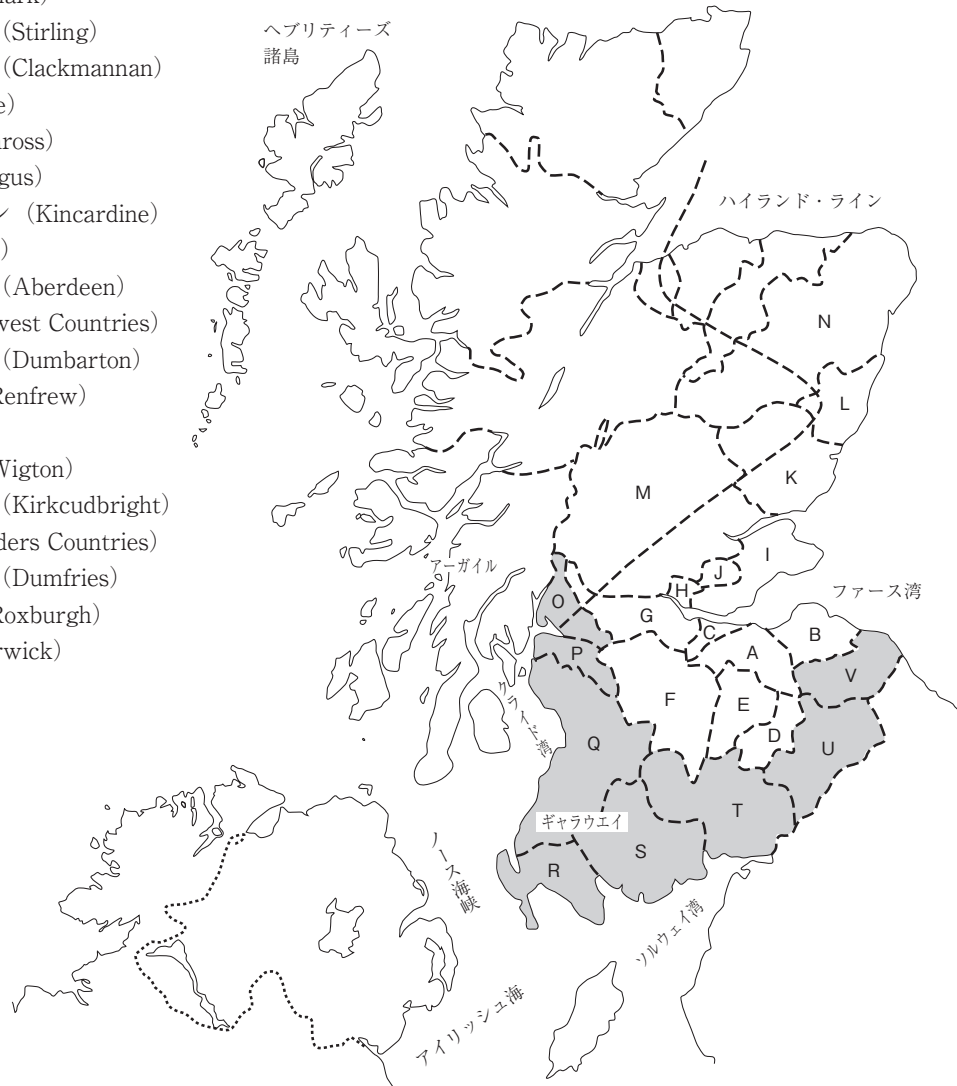


ローランドの範囲について問題を提起する。図2に示すように、エディンバラ、ハディントン、ラナーク、スターリング、ファイフ、さらにはアングラス、パース、アバディーンにまで「ハイランド・ライン」の東側に広がる東北部の伝統的「ローランド地方」と、ダンバートン、レンフルー、エア、ウイグタン、カークブリーなどの「南西部」(Southwest counties) およびダンフリーズ、ロクスバラ、ベリックなどの「国境地方」(Border-counties) を合わせた「南西部・国境地方」とは、同じローランドであっても、歴史、言語、エスニシティなどの点で異なっているというのである。

従来、「ケルト的なハイランドに対するアングロ・サクソンのローランド」という対比だけが強調されてきたが、クライド湾とソルウェイ湾に囲まれた南西部およびイングランドと接する国境地帯(両地方とも、その大部分が南部アップランドにつながる高地地帯である)の大部分は、もともとケルト文化と言語の影響を受けてきた地域であった。実際、スコットランドを「フォース湾とクライド湾を結ぶ線以北のスコシア (Scotia)」、<sup>1)</sup>「伝統的なローランドであるロジアン (Lothian)」、<sup>2)</sup>「南西部のギャラウェイ (Galloway)」という三つに区分する考え方はあるが (Hill: 27)、ただ、「ハイランド」、「ローランド」、「南西部・国境地方」という三つに分ける考え方はあまり一般的ではないかもしれない。アラン・ゲイリーは、アルスターへの入植は「イングランドから多く (many)、ウエールズからも多少 (a few) あったが大多数 (most) はスコットランドから」と述べたうえで、スコットランドからの入植については「西ローランド (west Lowland) と南西部 (southwest) から、初期にはイングランドとスコットランドの国境地帯 (borderlands) から<sup>3)</sup>も一定数 (some) やつてきた」(Galley: 3) と言い、ヒルの見解に似た言い方をしている。ともあれ、ヒル論文の真価は、こうした「ローランド」出身の植民請負人と「南西部・国境」出身の植民請負人とは、一六二五年まで初期の「アルスター植民」において植民事業の成否に差が出ていた、ということを明らかにしようとした点にある。

図2 スコットランドの地域区分 (17世紀)

1. ローランド地方
  - A. エディンバラ (Edinburgh)
  - B. ハディントン (Haddington)
  - C. リンリスゴー (Linlithgow)
  - D. セルカーク (Selkirk)
  - E. ピープルス (Peebles)
  - F. ラナーク (Lanark)
  - G. スターリング (Stirling)
  - H. クラクマナン (Clackmannan)
  - I. ファイフ (Fife)
  - J. キンロス (Kinross)
  - K. アンガス (Angus)
  - L. キンカーディン (Kincardine)
  - M. パース (Perth)
  - N. アバディーン (Aberdeen)
2. 南西部 (Southwest Countries)
  - O. ダンバートン (Dumbarton)
  - P. レンフルー (Renfrew)
  - Q. エア (Ayr)
  - R. ウィグタン (Wigton)
  - S. カーキューブリ (Kirkcudbright)
3. 国境地方 (Boaders Countries)
  - T. ダンフリーズ (Dumfries)
  - U. ロクスバラ (Roxburgh)
  - V. ベリック (Berwick)



〈出典〉 Smout, T. C. N, C. Landsman and T. M. Deving, 'Scottish Emigration in Seventeenth and Eighteenth Centuries', in Nicholas Canny (ed.) *Europeans on the Move: Studies on European Migration 1500-1800*, Oxford University Press, 1994, p.79 および Perceval-Maxwell, M. *The Scottish Migration to Ulster in the Reign of James I*. Routledge & Kegan Paul, 1973, p.368. などから作成。

図 1 に示しておいたように、スコットランド人の植民請負人のうちの五八名<sup>(2)</sup>に開発が委ねられたアルスターのバロニーは、アーマー州のフューズ (Fews)、キャバン州の克蘭キー (Clankee) とタリユンコ (Tullyhunco)、ドニゴール州のボイラ／バナー (Boylagh and Banagh) とポートルフ (Portlough)、ファーマナ州のノックニニー (Knockninny) とメガラボイ (Magheraboy)、ティロン州のマウントジョイ (Mountjoy) とストラバン (Strabane) の九つのバロニーである。それらの面積の合計は約七万九〇〇〇から八万エーカーにのぼるが、現実に開墾可能な面積はその一〇%前後にすぎなかったとも言われている。五八名の植民請負人の中にはスコットランドのレルド (爵位のない土地所有者) 出身者も含まれていたが、その内訳はエディンバラ、ハディントン、スターリング、キンロス、パースなどの「ローランド」出身者が二八名、残り三〇名がレンフルー、エア、ダンバートン、カークブリー、ウィグタンといった「南西部・国境地方」出身者であった。<sup>(3)</sup> 「ローランド」出身の請負人には、スコットランド系の土地の四六%にあたる三万六五〇〇エーカーが、「南西部・国境」出身の請負人には五四%にあたる四万二五〇〇エーカーが割当てられている。

さて、一九二五年までの集計となるが、先述の条件の中の二つ、すなわち、「一定数以上のイギリス人 (スコットランド人) の成人男子を入植・定住させること」と「囲い地のなかに石造りの家屋を建築すること」という条件の達成という点から、スコットランド系請負人の成績をながめてみると、そこに明らかな違いが認められる。「ローランド」出身の請負人は、六名のエディンバラ出身の請負人をはじめ、自分のエステートに借地農とその家族の入植を実現できず、また当初より不在地主を決めこむなど、全体の半数以上が条件を達成できなかった。個別的に指摘してみると、「ローランド」出身者は、マウントジョイ、フューズ、タリユンコなどでは成功していたが、ノックニニーやメガラボイでは悲惨な結果となっていた。総じて「ローランド」出身者の二八のエステートのうち、失敗に終わったのは一五、成功したのは一三で、かれらの三万六五〇〇エーカーのうち、成功とみなさ

れるのは四四%にあたる一万六〇〇〇エーカーでしかなかった。ノックニニーやメガラボイでは一二名のうち一名の請負人が耕作可能なエステートを造ることができなかった。ちなみに成功した「ローランド」出身の請負人は一三名であったが、かれらは一六二二年当時で自分のエステートに四八六の家族、約二〇〇〇人の定住イギリス人（ほとんどはスコットランド人）を抱えていたことになる。

これに対して「南西部・国境地方」出身の請負人は、はるかに良い成績を示している。かれらに与えられた四万二五〇〇エーカーの耕地のうち、一六二二年までの一〇年余で、その二万九〇〇〇エーカーを成功裏に開発している。成功率は六八%で、これは「ローランド」出身の四四%をかなり上回る数字である。「南西部・国境地方」出身者の三〇のエステートのうち、二一が成功をおさめ、九つが失敗に帰したが、失敗に終わった九名の請負人の半数以上が入植条件の悪いドニゴール州のボイラ／バナーのバロニーのエステートを割り当てられていた。このことを勘案すると、六八%という数字はかなり控えめと言って差し支えないようであり、「ローランド」出身の請負人に比べて不在地主となる者の数も少なかった。ちなみに、二一の成功したエステートには五八九世帯のイギリス（スコットランド）人家族、約二三五〇人が定住していたが、その二〇%はカトリックであった。

いずれにせよ、一六二五年までの初期の「アルスター植民」の成否については言えば、「南西部・国境地方」出身のスコットランド人が入植した地域以外では成功したとはいえない、というのがヒル論文の分析である。なぜ、「ローランド」出身者は失敗し、「南西部・国境」の方に多くの成功者が現れたのか。このことの原因は何に求められるのだろうか。ヒル論文によれば、その答えは一口にエスニックで文化的な理由である。繰り返しになるが、同じローランド地方であっても「南西部」や「国境地方」は、ギャラウェイ地方など歴史的にケルト（ゲール）系の文化の影響の濃い地方であった。以下、言語、農耕と牧畜、宗教といった側面から、この問題を追求しよう。

- (1) 「国境地方」付近からの初期の入植者のなかには逃走中の犯罪者もふくまれていた模様である (Galley: 3)。
- (2) ヒルの五八名という数字はマックスウェルやロビンソンの六〇名と異なっている。この点について明記されていないが、おそらく、植民事業の成否を判断できない請負人がいたのであろう。
- (3) 図2を参照して欲しいが、パーシヴァル・マックスウェルの場合、六〇名の植民請負人の出身地は「ローランド」からが三一名いるが、その内訳は、エディンバラが九名、ハディントンが八名(三名は主請負人 chief undertaker)、リンリスゴーが二名、ラナークが三名、スターリングが二名(二名とも主請負人)、ファイフが二名、キントスが一名(主請負人)、アングスが一名、キンカーディンが一名、パースが二名という内容である。「南西部」からの二八名はダンバートンが二名、レンフルーが四名(一名が主請負人、エアが二名(一名が主請負人)、ウイグタングが七名、カークアブリが三名(一名が主請負人)という内容であり、「国境地方」からはベリックの一名であった (Perceval Maxwell: 368)。

### 三 アルスターとスコットランド南西部

#### 1 歴史

ブリテン島にケルト民族の第一波が渡来したのは前七世紀頃にさかのぼると言われているが、史実として例証できるイギリス史は、普通、前一世紀頃のローマ帝国の侵入と支配(ローマン・ブリテン)から始まるようである。<sup>(1)</sup>ローマ軍は紀元一世紀後半にはペニン山脈の北部に達し、今日のイングランドに相当する地域の大部分を支配するようになった。先住のケルト系住民を「ブリトン人」(Britons)と呼び、この島を「ブリタニア」と名づけたローマ帝国は、その大半をその後約四〇〇年にわたってローマの属州として維持することになったが、ブリテン島の三分の一を占め、「カレドニア」と呼ばれるようになった今日のスコットランド方面には、やはりケル

ト系と言われている「ピクト人」(Picts)が住みついており、ローマの北上を阻んでいた。五世紀以降、ヨーロッパ大陸におけるゲルマン諸民族の移動にもなつてローマ帝国の勢力後退とローマ軍のブリテン島からの撤退が始まると、それに代わつてアングロ・サクソンの「アングル人」がブリテン島の東北部に侵出するようになり、やがて七世紀末から八世紀前半にかけてイングランド北部からスコットランド東部のロジアン方面にまで「ノーサンブリア王国」(Kingdom of Northumbria)を樹立するようになった(富田、一一―一二頁)。

スコットランド西部方面に目を向けると二つのケルト系民族の動きが注目される。一つは、この地方にローマ時代より残っていた「ブリトン人」の場合であつて、今日のグラスゴー北西部に位置する中心地ダンバートンから南下し、クライド湾からソルウェイ湾にかけてのスコットランド南西部に支配を拡大し、「ストラスクライド」(Strathclyde)という王国を形成している。この王国は、ノース海峡の沿岸部を支配下におさめ、一時はカンブリアやウエストモールランド地方を併呑しつつ、一一世紀に今日のスコットランドの原型であるアルバ王国(中世スコットランド王国)に併合されるまで持続した。

もう一つは「スコット人」(Scots)の場合で、アイルランドのアントリム北部を出身地とするこの民族は、四世紀から五世紀にかけてノース海峡を渡つてスコットランドのアーガイル(Argyll)地方と、その島嶼部やヘブリチーズ諸島に領土を拡張、海を挟んだ「ダルリアダ」(Dalriada)という王国が出現することになった。スコットランド(スコット族の国)という名前をもたらしことになった、このアイルランド系スコット人の王国も、一時、南西部のギャラウェイやローランド方面にまで版図を伸張したようだが、広くハイランド地方から東北部を支配していた先住のピクト人と激しく覇権を争いながらも、やがて両者は統合の道を選び、八四三年前後に「ダルリアダ」出身のケニス・マカルピンがピクトの王を兼ねて、上記の「アルバ王国」が出来上がった<sup>(2)</sup>。

飯島啓二によると、『教会史』で有名なベードは七三一年の時点の状況を以下のように記しているとのこと

ある。

現在ピクト人はアングル人と平和な関係を保っている。ブリタニアに居住するスコット人は自己の領域に満足し、アングル人にたいしてなんら敵意をいだいていない。ブリトン人は、一部では独立しているが、各地でアングル人に服している(飯島、一二六頁)。

これら四つの民族の大雑把な地域的分布は図3に示すとおりであるが、八世紀末になると航海術に優れたスカンディナヴィア出身の北方人(ヴァイキング)が南下を始め、九世紀末にはオークニー諸島やシェットランド諸島、それにスコット人ゆかりのヘブリチーズ諸島、さらにはスコットランド沿岸部の一部を占領するようになり、ノーサンブリア王国にも支配権を確立するようになった(富田、一一頁)。そして一一世紀にはノルマン征服王朝によってアングロ・ノルマン人がスコットランドにも定住するようになり、現在のスコットランド人の人種・民族構成が出来上がったが、ここでの関心から注目すべきことは、アルスターとスコットランドの間の人の移動、とくにアントリムとアーガイル地方(ハイランド)との場合であつて、それはスコットランド人による当初の襲撃や略奪から交易を中心とする形に発展し、中世期以降も絶えることはなかったのである。

その一端について補足しておく、たとえば一三世紀後期には、アーガイル地方の「ギャログラス(傭兵)」(galloglass)がアルスターのケルト封建氏族に招かれて定住を続け、その子孫に当たる「レッドシヤンク」(red-shanks)も一五世紀後期から季節的な傭兵としてアルスターとスコットランドを往来するようになっていた(Smout et al.: 77)。さらに重要な事実としては、アーガイル地方を出身地とするマクドネル一族(the MacDonnell)の場合であり、この一族は一四世紀から王族間の婚姻を通じてアントリムに土地を所有して<sup>(3)</sup>おり、スコットラン

図3 スコットランドの民族 (8世紀頃)



ドで圧迫されるようになった一五世紀の終わりに  
はアントリム北部へ移住し、この地をスコットラ  
ンドのテリトリリーとして支配することになった  
(Buchanan: 58)。「アルスター植民」に先立ってエ  
リザベス一世がマクドネル一族にアントリム東北  
部のグレナーム地方を分与したのには、こうした  
経緯が働いていた。

## 2 言語

さて、「言葉」の問題を中心に議論をスコット  
ランド「南西部」に限定してみよう。繰り返し言  
えば、フォース川とクライド川を結ぶ線の南に広  
がり、ロジアン地方の西部に位置し、クライド湾  
とソルウェイ湾に囲まれた「南西部」は、スコッ  
トランドの他の地方と同様、ローマ帝国の支配が  
及ばずラテン語やローマの文化の影響を受けな  
かった地方であり、上述のように、ローマの撤退後  
にケルト系「ブリトン人」の「ストラスクライド  
王国」が誕生している。「ブリトン人」は、南西



沿岸部のギャラウエイ方面の住民とともに「Pケルト」(P-Celtic)のブリトン語を話し、ゲルマン系(テュートン系)のアングル人、北方人(ヴァイキング)、ノルマン人などとは言葉が異なり、また同じケルト語であっても、かれらの北方に隣接した「Qケルト」(Q-Celtic)の「スコット人」やピクト人<sup>(4)</sup>とも異なっていた。

ケルト語はインド・ヨーロッパ語族に属する言語であり、グレート・ブリテン島とアイルランド島などから成るイギリス諸島の場合、歴史的にみると、ケルト語は大きく二つに分けられる。ブリテン島のケルト語はブリトン語またはブリソン語(Brittonic or Brythonic)群に属し、アイルランドのケルト語はゴイデル(Goidelic)語群に属する。音韻上の違いから前者が「Pケルト」、後者が「Qケルト」と呼ばれるのである。「Pケルト」の歴史的な語圏はブリテン島の西側、つまり、コーンウォール、ウェールズ、カンブリア、スコットランド南西部にいたる地域であって、具体的には、コーンウォール語(Cornish)、ウェールズ語(Welsh)、カンブリア語が該当し、フランス・ブリターニュ地方のブルトン語(Breton)も「Pケルト」である。他方、アイルランドのケルト語(ゲール語またはアイルランド語)やマン島語(Manx)とともにスコットランドのゲール語は後者の「Qケルト」である。<sup>(5)</sup> おそらく歴史を太古の昔にさかのぼれば、スコットランドはおろかブリテン島全域で「Pケルト」がしゃべられていた時代があったはずであり、一〇世紀以前のスコットランドでは、「ストラスクライド」だけでなくカンブリアの「レージド」(Rheged or Reged)など、アイルランド海沿岸部の王国でも広く「Pケルト語」が用いられていたようである。

ケルト民族のなかでアイルランドやスコットランドに定住することになった人々を「ゲール」と言い、その言語を「ゲール語」(Gaelic)と呼ぶ(水之江、五四頁)。現在、スコットランドでゲール語(ケルト語)といえは「Qケルト」を指すが、これまでの議論からも明らかのように、それは五世紀以降にアイルランドからスコットランドに移植されたものであり、先述のように、アイルランドを故郷とする「スコット人」のスコットランド西

部方面への進出と「ダルリアダ王国」の成立は、聖コロンバの布教に見られるキリスト教のスコットランドへの伝播とともに、ゲール語（Qケルト）の移植をともなうものであった。ゲール語の影響は、一時、ローランド東部にまで及んだようであるが、すでにローランドには、アングル人の定住によるゲルマン系の言葉や方言の浸透が顕著に起こっており、スコットランドの言語状況は一応の地域的分化をともないながら多言語的な様相を示すようになった。

一〇世紀にはスコットランドではケルト語が話されていた。古ウェールズ語であるブリテイッシュ・ケルト語（British Celtic）は南西部で、ゲール語はフォース川とクライド川の北部や西部の島々で、スカンディナヴィア語はケイスネスや北の島々で、フォース川の南部ではノーサンブリア方言が主として話されていた（八村、七三頁）。

ただ、ここで「古ウェールズ語であるブリテイッシュ・ケルト語」と言われている南西部の「Pケルト」は、「レージドのブリトン人は七五六年以後アルスターとアーガイルからのゲール人によってゲール化され」（ブルンナー、九頁）、ストラスクライドは最も長くブリトン語系のままであったにせよ、そこでも「ゲールの地名がブリトンの地名よりもはるかに頻繁に見られる」（ブルンナー、三二頁）と指摘されるまでになり、すでにゲール語（Qケルト）に圧倒され、「Pケルト」はしだいに使用圏が局所化されたようである。

以下、「アルスター植民」が開始される一七世紀に近づけて整理しておく、アルスターへの入植者の多かったスコットランド南西部で一六世紀前後に話されていた口語はゲール語であることは疑いなく、この地方が「Pケルト」から「Qケルト」へと変化していたことも明らかである。ケネス・ジャクソンは、この動きがすでに一世紀から起こっていたことを指摘して次のように述べている。

ストラスクライドだけをとっても、おそらくその口語は、カーラムの戦いを経てスコットランドに併合されるまでは、一様にカンブリア系 (Cumbria) であつたが、地名から判断すると、ラナークシャーやレンフルーシャーではゲール語の地名がブリトン語の地名の約二倍あり、ストラスクライドは完全かつ急速にゲール化したようである。おそらくゲール語の影響は一一世紀以前にも盛んに起こっていたようであり、ゲール語の影響とともに一二世紀になってスコットランド封建制の下にノルマン人やイングランド人が来住した結果、ほどなく、この地方のカンブリア系の言葉も、そしてウェールズ北西の島嶼部 (Anglesey) より北の、いかなるタイプのブリトニックな口語も完全に消滅することになった (Jackson: 88)。

では、ゲルマン (アングロ・サクソン) 系の言語との関係はどうだったのだろうか。右に引用したジャクソンの文にある「ノルマン人やイングランド人の来住」によって、この地方はゲルマン系の言語をどのように受容したのだろうか。一般的には、「一六世紀までは、ハイランドではケルトの言葉であるゲール語と、ローランドにおいては英語と同系語のスコットランド語の二つが使用されていた」(富田、一〇頁) と言われるように、ローランドでは「スコットランド語」、すなわちアングロ・ノルマンの移住者の影響を強く受けた、英語の「一方言葉種」と見なされることも多い「スコッツ語」(スコットランド語) が使用されるようになった、というのが定説であり、<sup>(6)</sup> 宗教改革以降になると、スコットランド教会が英語訳聖書を使用したこともあつてスコッツ語の地位は低下し、ローランドでは英語化が顕著となつていったようである (木村、二二―二三頁)。

このように、「国境地方」はもとより「南西部」でも、一一世紀以降、アングロ・サクソン系の言語 (英語やスコッツ語) の影響は起こっていたが、ただ、ここでも「一四世紀までに、スコットランド英語は、ゲール語の

形態が一七世紀まで残存していたと思われるスコットランド南西部のギャロウェイ<sup>ママ</sup>を除いて、ハイランドの境界線の東と南の地方で、スコット族の全階級にわたって話し言葉の主要語となった」（八村、八〇頁）と言われるように、同じローランドでも「南西部」は異なっていた。「ギャラウェイの住民は、英語を話すロジアンの住民とは違って、ゲール語を話していた。かれらはゲール語を約六〇〇年間、ノルマン人がやってきた後までしゃべっていた」（Hill: 27）と言われ、「その北方系の出自にもかかわらず、ギャラウェイとキャリックの住民のほとんどはゲール語をしゃべっていたに違いなく、かれらは一七世紀まではゲール語をしゃべり続けていた」（Jackson: 888）という意見もある。いずれにせよ、「南西部」をゲール語一色に考えるのは問題であろうが、一七世紀初頭においても、多くの住民はスコツツ語や英語の浸透を受けつつも、まだゲール語を話していたことは間違いなようである。

アルスターに目を転じれば、一七世紀初頭のアルスターは 아일랜드の四つの地方の中でも最もケルト的な伝統を保持していた地方であった。ダブリン周辺の「ペイル」のようなイングランド王権の及んでいた地域を欠き、長くイングランドの影響から取り残された地方でもあった。古代ケルト語に由来する地名や史跡にも事欠かず、オガム文字（古アイルランド語の碑文用文字）、ドルメン遺跡、円塔、ケルト十字架なども少なくない。住民はゲール語をしゃべり続けてきたが、ただ、そのゲール語は、スコットランドのゲール語の影響を受けたゲール語であった。ヴァイキングの来襲の時期あたりをさかいに、両島間の人の移動は逆方向となり、「ギャログラス」や「レッドシャンク」のアルスター移住もあって、スコットランドのゲール語がアルスターのゲール語（アイルランド語）に影響を与えるようになったからである。当時のアイルランドのゲール語とスコットランドのゲール語との違いがどの程度であったのかは即断するだけの準備はないが、一七世紀の「アルスター植民」の時期になっても、入植者の言葉はアルスターのアイルランド人には十分に理解でき、かれらの間には言語的障壁はなかつ

たようである (Buchanan: 56)。

実際、スコットランド人の入植者が優勢であったアルスターの幾つかの地域では、「一八〇〇年になってもゲール語が依然として最も一般的な言葉であった」(Hill: 28; Gailey: 13-14) と指摘されている。ヒル論文に立ち返って言えば、スコットランドの南西部出身の入植者にとって、こうした言語的な同質性が、イングランド系やスコットランドのローランド出身の入植者に比べて好都合だったことは間違いないようである。アルスター植民は、やがてアルスターの社会関係に大きな変動をもたらし、言語の面でも、スコットランド系移住者のコミュニティには「アルスター・スコッツ語」(Ulster Scots) というゲルマン系の言葉が普及し、先住のアイランド人の言語との違いが明らかになるが、入植初期に関するかぎり、そうではなかった。南西部出身の入植者と地元アイランド人の文化的ギャップは言葉の面では思いのほか小さかったのである。

### 3 農耕技術と民俗文化

山本正は一六世紀のアイランドに関して「当時のゲール社会の社会経済的特徴を端的にあらわすタームとしては、さしずめ遊牧社会であろう。『放棄と再授封』は、その農耕定住社会Ⅱイングランド的社会への転化を狙っていた。農耕や恒久的家屋の建築の促進が強調されたことがそれを示している。この背景には、遊牧社会に必然的な人口の空間的流動性の高さが、ゲール社会の政治的、社会的不安定の一員だとする当時のイングランド人の思考があった」(山本、一九九二年、一一五頁)と論じ、アルスターなど特に「ゲーリック・アイリッシュ」の要素の濃い地域では、「一六世紀になっても牧畜中心の社会が維持されており、農耕が行われていなかったわけではないが、放し飼いの移牧が盛んであった」(山本、一九八八年、三三三頁)と指摘している。

入植地の条件によるが、「南西部・国境地方」の入植者の多くは、耕作農業よりも手のかからない牛や羊の牧

畜に従事することが多かった模様である。しかも、当時のアルスターの主流であった放し飼いの牧畜を踏襲したようである。実際、入植者が考案したのは家畜小屋や囲いのフェンスくらいであり、牛や羊の飼育と飼料、耕作方法など、スコットランド人がアルスターに持ち込んだ技術のなかに先住アイルランド人が知らないものはなかったようであり、この点でも、きわめて容易にアルスターの農耕方式に適応することができた。

エイダン・クラークの場合は、スコットランド系の入植者に関して、「自分たちの伝統、自分たち自身の制度や生活様式をもってきた。それはアルスター固有の伝統にとってはまったく異質なものでただけでなく、アイルランドの他のどの地方とも、性格的にまったく違うものだった。アルスターを特別のものにしたのは、植民者のプロテスタンティズムではなく、生活様式全体だった。……かれらはアイルランドの田園生活を拒否して、森林をきりひらき、耕地農業にうちこんだ」（クラーク、二二六頁）などと指摘しているが、ヒルの分析は、「一六二五年まで」という限定はあっても、こうした見解と対立することは明らかであろう。

ヒルの見解に近い見解を探せば、ロナルド・ブキャナンの見解などがそうであろう。すなわち、ローランド出身の人々も、ゲリックな遺産、伝統を共有しているという点では、たとえばアーガイル地方などのハイランド出身のスコットランド人とは大差なく、またハイランドの人々がそうであったように、かれらの生活様式も、当時のアルスターのゲール系アイルランド住民とほとんど同様であった。住宅の形態、屋根や壁の素材、耕作の方法、家畜の飼い方、農耕器具や道具の使い方、土地所有の形態、集落の形状、そして婚姻、家族、生活習慣、祭りなど、わずかな違いはあっても、かれらの「民俗文化」(folk culture) はアルスターとほとんど同様であった。つまり、スコットランドからの入植者と先住ゲール系住民、ハイランドとローランドのスコットランド系入植者、広くはスコットランドとアルスター、これらの住民の間を区別する要素は、その地理的な近接性と長い歴史的な人間の移動と交流のなかで、ここでの民俗文化という面での差も想像以上に小さく、むしろアルスターの地域的

アイデンティティと民俗文化は、スコットランドよりも、むしろマンスターやレンスターなどアイルランド南部地方との違いの方が大きかったのである (Buchanan: 59)。

以上のことを「南西部・国境地方」出身のケルト系スコットランド系入植者の場合にも敷衍してもよいであろう。かれらは、入植条件にあった堅固な石造りの住宅ではなく、暖炉や煙突もない粗末なアイルランド流の藁葺き小屋を急造して住み着くことができ、荒廃としたアルスターの地勢や粗野なアイルランド人の行動をあまり苦にしなかった。アルスターは、自然的にも文化的にも、自分たちの故郷の環境と類似しており、かれらにとってはフロンティアではなかった。

#### 4 宗教

最後に「宗教」の問題であるが、通説では、かりに言語、民俗文化や伝統技術という点で多くを共有していたとしても、「スコットランドの入植者の多くはカルヴァン派のプロテスタントであり、先住のアイルランド人は、カトリックとプロテスタントという宗教の点で違いが際立っていた」とする見解が一般的であるが、これも初期の入植者の場合は必ずしも妥当な見解とは言えないようである。スコットランド系の入植者の間に長老派のプロテスタントイズムが浸透するようになるのは一七世紀もかなり後になってからのことであり、当時は、まだアングリカンの国教会の影響が強く、また、入植者の信仰心の欠如を嘆く聖職者の記録などを勘案すれば、初期の入植者をプロテスタントと断定するのは妥当とは言えない。

「先住のアイルランド人はカトリックで入植したスコットランド人はプロテスタント」とか「ケルト系はカトリックで非ケルト系はプロテスタント」などと対比してもあまり意味がないようである。表向きはともかく、植民請負人の中にカトリックがいたことは間違いなく、ストラバンのバロニーには、かなりの数のカトリックの

コットランド人が入植、定住したようである。実際、プロテスタントの請負人がカトリックの借地農を入植させても不思議ではなく、一六二五年当時のアルスターには、大多数のアイerland人に加えて、スコットランド人移住者の中にも二〇%程度のカトリックがいたことを考えると、「アルスター植民」によってアルスターがプロテスタントの地方になったなどと考えること自体、事実と反するのである(Hill: 43)。いずれにせよ、ブリティッシュネスとプロテスタンティズムとを無理に結びつけようとするのは、ジョン・ポコックが主張する「アングロセントリズム」の例にもれず(Hill: 38)、かりに改宗してプロテスタントになっても、それでケルト系の人間のケルト性の程度が薄れるわけではない。

イングランド系の入植者が優勢であったデリーやコーレイン、ネー湖の南東部のアーマー方面などをのぞけば、アントリムやダウンはもちろん、アルスターはケルト系のスコットランド人やアイerland人の言葉、経済、慣習、集落形成、文化などが支配する、依然として未開な地域であった。多くのイングランド人やローランドのイングランド化されたスコットランド人の基準からすると未開で非文明的なアルスターであっても、ケルト系スコットランド人には居心地の悪くない場所であり、そこに生まれた文化的融合は、「アイリッシュでカトリック」(Irish and Catholic) ではなく「ブリティッシュでプロテスタント」(British and Protestant) でもない別のものであった(Robinson: 194; Hill: 43)。もちろん、アイerlandとスコットランドの生活様式には明らかに違いはあるが、一六二五年頃までのアルスターで優勢であった文化的パターンは、イングランド的でもイングランド化されたローランド的なものではなく、依然としてケルト的要素の濃いものであった(Hill: 43)。アルスターのスコットランド系プロテスタントのコミュニティの中に「アルスター・スコット語」が広く流布するようになり、アルスターがスコットランド長老派の一部の過激な人々の牙城となるのは、それから半世紀近く後になってからのことである。



- (1) ここでの記述は、青山吉信「先史時代のブリタニア」(青山編、三二二八頁) および木村・中尾編のスコットランドの歴史や言語に関する記述を参照している。
- (2) その後のスコットランドの略史に触れておくと、「アルバ王国はうちつづくノース人の来襲に持ちこたえ、かえってノーサンブリア王国の支配を脱したアングル人の地ロジアンに、食指をのぼした。一〇世紀末までにロジアンがアルバ王国に服属した。さらに一〇一八年にアルバ王国のマルカム二世(一〇〇五—一〇二四年)は、イングランド王カヌートの命を受けた軍にイングランドとの国境に近いカーラムにて勝利し、長い目で見れば、この戦いがアルバ王国の南の国境線を確定することになった。一方、ロジアンの西南に位地したブリトン人の王国ストラスカライドは、カーラムの勝利に貢献したにもかかわらず、一〇三四年のダンカン一世(一〇三四—一〇四〇年)即位時に、血統を口実にアルバ王国に併合されてしまう」(富田、一三一—一五頁)。
- (3) 一三九九年にモー・マクドネル (Mor MacDonnell) がグレン地方の女性相続人であったマージョリー・ビセツト (Margery Byset) と結婚してアントリムに土地を相続した。マクドネル一族の絶頂期は一五五〇年代で、ジェイムズ・マクドナルドはバリキャッスル (Ballycastle) からグレナーム (Glenarm) までの海岸線を占有していた (Morgan: 14)。
- (4) スコットランドの先住民ピクト人の言語については不明な点が多いようである。「王の名前などの分析からブリトニック語 (Brytonic) あるいはPケルト語からかなり早い時期に分化して独自の展開をとったと推定される」(木村・中尾編、常見信代執筆、三四二頁) とされたり、「北に定住していたピクト人の二つの言語のうち、一方はPケルトであり、もう一方の言語は印欧語ですらなく由来ははっきりしない」(木村・中尾編、岩瀬ひさみ執筆、四三一頁)とも言われたりしている。
- (5) 青山吉信は「『Qケルト語』では、本来のインド・ヨーロッパ語のqをqと発音し(後にkの発音に転ずる)、cと書かれるのを特徴とする。『Pケルト語』では、それをpと発音し、書かれる。一例をあげれば、headを意味する語は、『Qケルト語』では'cenn'に、『Pケルト語』では'penn'となる」(青山、二八頁)と紹介している。「Pケルト」と「Qケルト」の違いなど、ケルト語に関する言語学的な文献は相当数に上ると思われるが、ここでは比較的新

しい文献として、杉本（二〇〇六年）と手塚（二〇〇七年）の二つの論文をあげておく。

(6) スコッツ語はインド・ヨーロッパ語族であってもゲルマン語派に属し、ケルト語に由来するゲール語とはまったく別の言葉である。それは、アングロ・サクソン人がブリテン島にもたらしたアングロ・フリージア語 (Anglo-Frisian) から発展した、七〇〇年頃から一一五〇年頃までの古英語 (Old English) を起源としている点で英語と共通している (中尾正史「スコットランドの言語」木村・中尾編、四二四頁)。

(7) アルスター長老派教会の歴史を論じている著作は異口同音に、初期の入植者の一面に関して「借金倒し、不法者、スキヤンダルまみれの者なども少なくなく、アルスター入りした牧師たちの多くは、このような神を畏れない不道徳で貧困な入植者の間で神の福音を説くことに奮闘した」ことを記録しているようである。ロバート・ブレアとかジョン・リヴィングストンなどの一七世紀前半の初期の牧師については、松井（二〇〇二年、一三八―一五三頁）を参照されたい。

#### 四 若干の問題

レイモンド・ギレスピーの著作『植民時代のアルスター』は、「アルスター植民」の対象外となったアントリムとダウンについての研究であるが、そこには、一六三〇年頃の両州に在住しているスコットランド人の出身地を、かれらの姓名から判断して特定した図が掲載されている (Gillespie, 1985: 32)。図4がそれであり、かれらの出身地は、ラナーク、レンフルー、スターリング、国境地方のダンフリーヤカーケーブリ、それにハイランドのアーガイルにまで広がっているが、何と云っても、その主要な輩出地はノース海峡に面した南西部のエアシャーとギャラウェイおよびその島嶼部に集中している。両州の開発を委ねられたモンゴメリーとハミルトンの故郷は、エアシャーのブライドスタン (Braidstane) とダンロップ (Danlop) であり、一応は、かれらの故郷に近い地方から多くの入植者がリクルートされたことが想像される。

図 4 スコットランド人の出身地 (アントリムとダウン)

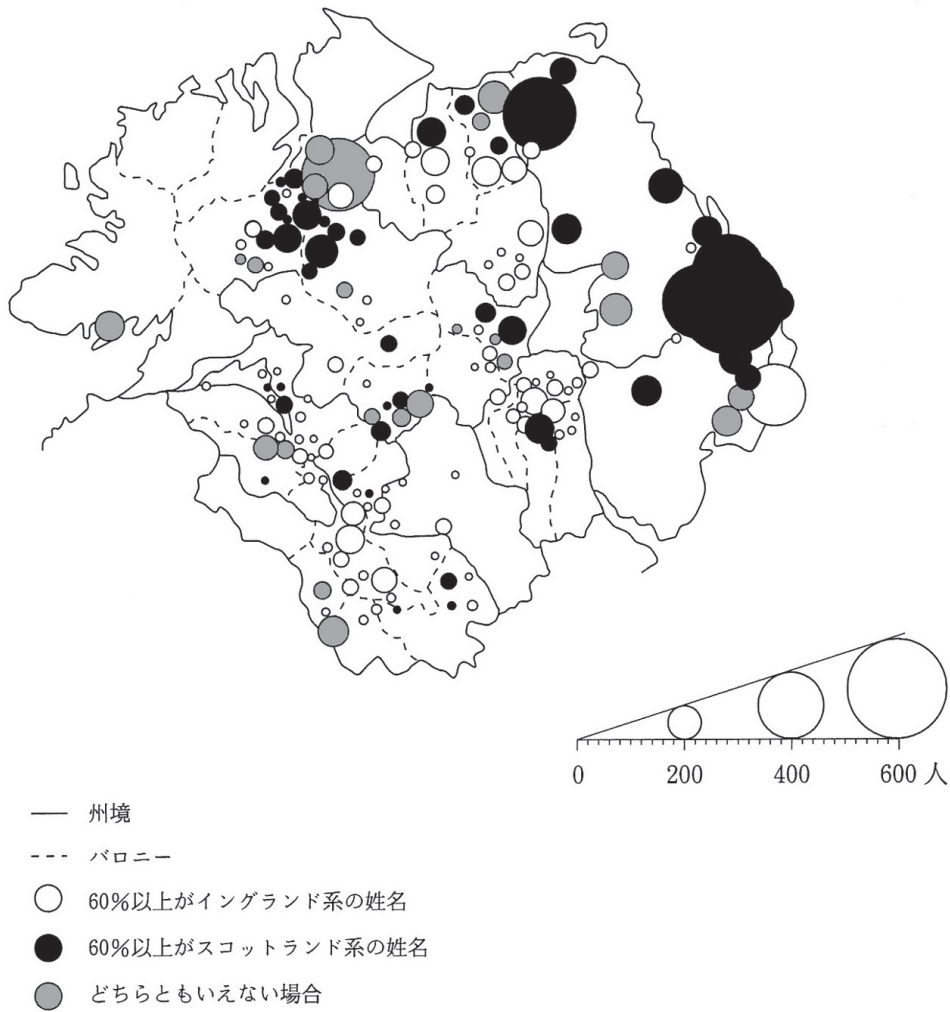


〈出典〉 Gillespie, Raymond, *Colonial Ulster: The Settlement of East Ulster 1600-1641*, Cork University Press, 1985, p.32.

「アルスター植民」によって内陸部のエ  
ステート（農園）へ入植したスコットラン  
ド系の人口の場合も、植民請負人の出身地  
付近から多く入植者がリクルートされてい  
る、といった同様の事実が認められるのか  
どうか、やはり問われねばならないだろう  
が、ヒル論文は、この点には触れていない  
のである。

ギレスピーと同様に「点呼調査」  
(muster-roll) を用いて、入植者の姓名から  
一六三一年当時のイギリス人のアルスター  
における居住分布を示しているフィリッ  
プ・ロビンソンの図5によれば、スコット  
ランド系の人口は、アントリム州南部およ  
びダウン州北部一帯へ圧倒的集中を示し、  
その他では、ロンドンデリー州北東部、ド  
ニゴール州北東部のフォイル川流域のラガ  
ン (Laggan) 地方などにもスコットランド  
系人口の集積が認められる。スコットラン

図5 イギリス人入植者の分布（1631）



〈出典〉Robinson, Philip S, 'Plantation and Colonisation: The Historical Background', in Boal, Frederick W. and J. Neville H. Douglas (eds.), *Integration and Division: Geographical Perspectives on the Northern Ireland Problem*, Academic Press, 1982, p.32.

ドの植民請負人に分与された九つのバロニーを示した最初の図1と見比べてほしいが、人口量としてはともかく、たしかにスコットランド系人口の多い場所は、アーマー州のフェーズ、ファーマナ州のメガラボイ、ティロン州のマウントジョイなどのバロニーに重なっている。しかし、その反面、スコットランド系人口の集中しているロンドンデリー州北東部（コーレイン周辺）について言えば、もともとロンドンデリー州はロンドンの一二のカンパニー——実質的な植民事業に着手することとはなかったが——に分与された、いわばイングランド系

人口の入植が予期されていた州であったし、同様に、ドニゴール州北東部のラガン (Laggan) 地方にもスコットランド系人口の集住が認められるが、一部、ポートルフ・バロニーと重なるものの、やはり、その辺一帯もイングラント系の植民請負人に委ねられた地方なのである。

ロビンソンの場合は、主にイングラント系かスコットランド系か、という違いが念頭にあるようだが、かれ自身も「請負人と入植者の出身地の一致がアーマーやキャバンの大半、ロンドンデリーの中部・南部、ティロンの北西部などでは認められる」と言いながらも、「いくつかの地域では、スコットランド人の入植者がイングラントの請負人に割当てられた場所に集住し、逆のケースもないわけではない」と述べ、「移住者のエスニック・オリジンは、土地所有者のそれと必ずしも一致していないことは明白である」(Robinson, 1982: 22-23)と考えている。

スコットランド系の請負人と入植者の出身地の関係はどうか。もとより筆者の能力のおよぶところではないが、「点呼調査」の原資料もあるので、ギレスピーやロビンソンのように入植者の姓名を手掛かりに入植者の出身地をスコットランドにさかのぼって特定することもできそうであるが、二次的文献に関するかぎり、そのような研究は発表されていないように思われる。ただ、考えてみれば、請負人と入植者の出身地を同郷と想定するような仮説、すなわち、南西部の請負人は主に南西部から入植者(借地農)を見つけ、「ローランド」の請負人はローランドから入植者を見つけている、といった仮説自体、かなり危険な仮説なのかもしれない。前記のように「移住者のエスニック・オリジンは土地所有者のそれと一致しない」と主張するロビンソンは、スコットランド系の場合についても、このような同郷仮説には否定的で、「スコットランド系入植者の輩出地 (source areas) が、その後のアルスター植民の定住地を決定するのに影響することになった、と示唆するような仮説はまったく容認できない」(Robinson, 1982: 80)とまで断言している。すでに述べたように、植民請負者の多くが、

アルスターの土地を自分の目で評価する前にその開発権を売却していたのであり、「一六一九年までにスコットランド人請負人の五九のエステートのうちの三三は所有者が変わっていた」(Robinson, 1983: 80) ことも、同郷仮説の妥当性を攪乱する要因であろう。

いずれにせよ、ヒル論文は、ケルト系の「南西部・国境地方」と非ケルト系の「ローランド」という区別を「植民請負人」については設定したが、多くの入植者の出身地については無言である。かれは、植民請負人のエスニシティ(出身地方)だけで植民事業の成否を語ろうとしているのだろうか。「ローランド」の請負人は「ローランド」地方から入植者をリクルートしたのだろうか。「南西部・国境地方」からは入植者をリクルートしなかったのだろうか。あるいは、図5でみたように、スコットランド人口のアントリムとダウンへの圧倒的な集中を考えると、「ローランド」の請負人は入植者をスコットランドからではなくアルスター内部からリクルートしたのではないだろうか。そのさい、募集したが集まらなかったのだろうか。入植させたが定住させるのに失敗したのだろうか。かりに入植者の多くがノース海峡に面した「南西部」の沿岸地方で、ケルト系のかれらが「ローランド」の請負人のエステートで雇われていたと仮定してみると、その場合は、植民事業の成否は入植者のエスニシティではなく請負人の経済状況や経営手腕などが問われることになる。あるいは案外、農業条件の良い肥沃な低地(Low-lying)や放牧に適した地域に展開したエステートが成功したのではなかったか、などと素朴な疑問を提起したくなる。

アルスター植民事業も一七世紀後半に入ると、入植者のアルスター内部での移動が頻繁となり、スコットランド系の人口についても、かれらの出身地方を区別する意味は失せるようになったはずであり、その意味では、まだケルト系と非ケルト系という区別が持続していた時期を扱ったヒル論文の意義は十分に評価すべきかもしれないが、肝心のエスニックなオリジン(出身地)の問題について、請負人と入植者(借地農)の関係をめぐる問題

を不問にしたため、仮説自体の信憑性にも疑念を抱かせる結果となってしまった。

### 結びにかえて

デイヴィッド・アーミティジは、ヒル論文を引用して「アルスターにおける初期の最も成功したスコットランド人の入植者はゲール語をしゃべるスコットランドの国境地方や南西部方面から移住してきた人々であって、かれらはアルスターの先住アイルランド人と文化的に最も近い人々であった」(Armitage, 1997: 46)と述べた上で、一六〇四年の即位にさいしてグレート・ブリテンの王であることを自認したジェイムズ一世が「アルスター植民」を「明確にブリテンの事業として推進した」(Armitage, 2000: 57 = 七三頁)ことを強調している。その証左の一つは「イングランドの請負人に八万一五〇〇エーカ、スコットランドの請負人に八万一〇〇〇エーカと、ほぼ同等の土地を分与したことも表れている」(Armitage, 1997: 44-45)。

アルスター植民は「統一的ブリテン君主国を創出するというジェイムズの決意の中では、もっとも実り多い成果となった」(Armitage, 2000: 58 = 七四―七五頁)と言われているが、その成果は、入植の開始からほぼ三〇年後の一六四一年、アルスター全土を震撼させた「カトリックの反乱」によって水泡に帰しかねない状況に陥った。多くの入植者が殺され、それ以上に多くがアルスターを離れることになったが、ただ、ヒルによると、「反乱」の時期、「カトリックの怒りの矛先はイングランド系の入植者など非ケルト系の入植者に向けられ、反乱軍の指揮官は、南西部・国境地方出身のケルト系スコットランド人の居住地は攻撃の対象から除外するように命令した」(Hill: 42)と記している。もし、このことに間違いなければ、アイルランド人の側には、たとえば宗教の違いなどよりもエスニシティの方が大きな意味をもっていたことになる。同じケルト系のエスニシティを共有する

先住者と移住者の文化的な同質性は、やがて顕在化する宗教の違いを覆い隠していた。アルスター地方に新しい「ブリテン人」（イギリス人）を導入して、アイルランドのゲール人とスコットランドのゲール人のあいだに安定した緩衝地帯を創り、両者を分断しよう試み」（小野、一三八頁）は頓挫したのである。やがて同じケルト系であっても、アイルランド系とスコットランド系は激しく敵対することになるが、まだ一七世紀の前半においては、これらの間に「くさび」を打とうとする試みは成功しなかったのである。このことも含め、アルスターのスコットランド系移住者のコミュニティにおける「ブリティッシュネス」の歴史の変遷については別の機会に論じたい。

#### 参照・引用文献

- 青山吉信編（一九九一年）『世界歴史体系・イギリス史Ⅰ』、山川出版社。
- Armitage, David (1997) 'Making the Empire British: Scotland in the Atlantic World 1542-1707, *Past and Present*, no. 155, pp.34-63.
- (2000) *The Ideological Origins of the British Empire*, Cambridge University Press. (邦訳) デイヴィッド・アーミテージ著(平田雅博・岩井淳・大西晴樹・井藤早織訳)『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源—』、日本経済評論社、二〇〇五年。
- Bacon, Francis (1868) *The Works of Francis Bacon*, vol. xl. (The Letters and the Life, vol. iv), edited by James Spedding, et al., pp.116-126.
- K・ブルンナー (Karl Brunner) 著、松浪有他訳（一九七三年）『英語発達史』大修館書店。
- Buchanan, Ronald, H. (1982) 'The Planter and the Gael: Cultural Dimensions of the Northern Ireland Problem', in Boal, Frederick and Neville Douglas (eds.) *Integration and Division: Geographical Perspectives on the Northern Ireland Problem*, Academic Press, pp.49-73.
- Campbell, Flann (1991) *The Dissenting Voice: Protestant Democracy in Ulster from Plantation to Partition*, The



Blackstaff Press.

- Canny, Nicholas (1998) 'The Origins of Empire: An Introduction', in Nicholas Canny (ed.) *The Origins of Empire: British Overseas Enterprise to the Close of the Seventeenth Century*, Oxford University Press, pp.1-33.
- クラーク、エイダン (一九八二年) 『アルスターの植民地化と一六四一年の蜂起 (一六〇三—一六〇四)』T・W・ムーデー・F・X・マーチン編著 (堀越智監訳) 『アイルランドの風土と歴史』 論創社、二〇一〇—二〇一一年、二四—二五頁。
- Gailey, Alan (1975) 'The Scots Elements in North Irish Popular Culture', *Ethnologia europaea*, vol.8, no.1, pp.1-22.
- Gillespie, Raymond (1985) *Colonial Ulster: The Settlement of East Ulster 1600-1641*, Cork University Press.
- (2002) 'Making Ireland Different', *Irish Economic and Social History*, vol.29, pp.120-26.
- 八村伸一 (一九九三年) 『スコットランドの実像—言語と民族的気質の考察—』、リール出版。
- Hill, Michael (1993) 'The Origins of the Scottish Plantations in Ulster to 1625: A Reinterpretation', *The Journal of British Studies*, vol.32, no.1, pp.24-43.
- 飯島啓二 (一九九一年) 「スコットランド王国の形成」 青山編、二〇一〇—二〇一一年、二二—二五頁。
- Jackson, Kenneth (1955) 'The Britons in Southern Scotland', *Antiquity*, vol.29, no.114, pp.77-88.
- Kelly, William P. and John R. Young (eds.) (2009) *Scotland and the Ulster Plantation: Explorations in the British Settlements of Stuart Ireland*, Four Courts Press.
- 木村正俊 (二〇〇八年) 「スコットランドの実像を求めて—多元性をもつネイションの検討—」 日本カレドニア学会創立五〇周年記念論文集編集委員会編 『スコットランドの歴史と文化』 明石書店、九—三一頁。
- 木村正俊・中尾正史編 (二〇〇六年) 『スコットランド文化事典』、原書房。
- Macafee, William (1987) 'The Population of Ulster 1630-1841', Unpublished D. Phil Theses (Ctrl No. y6930332), Jordanstown, University of Ulster.
- 松井清 (二〇〇一年) 『アルスター植民』と居住分離の成立—一七世紀アルスターにおけるスコットランド系入植者—」 明治学院論叢第六六〇号、『社会学・社会福祉学研究』 第一一〇号、五七—一一七頁。
- (二〇〇二年) 『アルスター長老主義の形成と発展—『契約派』の歴史的系譜を中心に (上)—』 明治学院論

- 叢第六七二号、『社会学・社会福祉学研究』、第一一一号、一二九—一七九頁。
- 松川七郎（一九六四年）『ウイリアム・ペティ（下巻）』、一橋大学経済研究叢書一四、岩波書店。
- 水之江有一（一九九四年）『アイルランド―緑の国土と文学―』、研究社出版。
- Moody, T. W., F. X. Martin and F. J. Byrne (eds.) (1976) *A New History of Ireland III, Early Modern Ireland 1534-1691*, Oxford University Press.
- Morgan, Hiram (1988) 'The end of Gaelic Ulster: a thematic interpretation of events between 1534 and 1610', *Irish Historical Studies*, vol.26, no.101, pp.8-32.
- 中尾正史・岩瀬ひさみ・米山優子（二〇〇六年）「スコットランドの言語」（木村・中尾編、四二四—四四三頁）。
- 小野功生（二〇〇六年）「文明から野蛮へ―スコットランド、アイルランドとブリテン帝国の起源―」小野功生・大西晴樹編『〈帝国〉化するイギリス―一七世紀の商業社会と文化の諸相―』彩流社、一三一—一六三頁。
- Perceval-Maxwell, M. (1973) *The Scottish Migration to Ulster in the Reign of James I*, Routledge & Kegan Paul.
- Robinson, Philip S. (1982) 'Plantation and Colonisation: The Historical Background', in Boal and Douglas (eds.) pp.19-47.
- (1984) *The Plantation of Ulster: British Settlement in an Irish Landscape 1600-1670*, Ulster Historical Foundation.
- Snout, T. C. N., C. Landsman and T. M. Deving (1994) 'Scottish Emigration in Seventeenth and Eighteenth Centuries', in Canny, Nicholas (ed.) *Europeans on the Move: Studies on European Migration, 1500-1800*, Oxford University Press, pp.76-112.
- 杉本豊久（二〇〇六年）「スコットランドにおける言語事情とグラスゴウのゲール語教育」成城大学『成城文芸』、一九六号、八三—九九頁。
- 手塚順孝（二〇〇七年）「イギリスにおける少数言語（ケルト語）と英語の二重表記―ケルト系言語の使用状況と言語政策を中心に―」『北海道教育大学紀要、人文学・社会科学編』、五七巻、二号、一四七—一五九頁。
- 富田理恵（二〇〇二年）『世界歴史の旅スコットランド』、山川出版社。

山本正(一九八八年)「対抗宗教改革とアイルランド——一六世紀アイルランドの政治・社会・宗教——」『大阪経済大学教養部紀要』第六号、二四—三八頁。

——(一九九二年)「旧き『新世界』——一六世紀後半、イングランド人入植者にとつてのアイルランド——」『大阪経大論集』第四二巻、第五号、一〇五—一三九頁。

〈追記〉学部四年生のとき、たまたま学生論文集へ投稿する機会があり、香港中文大学に出講中の十時先生にお手紙を差し上げ、おそろおそろ下書きを香港にまで郵送させていただいた。真っ赤に訂正されて送り返されてきた原稿は今でも大切に保存しているが、そのときの先生のコメントなどが、私の学究の道への動機づけとなったのかもしれない。それから四〇年余、今でも、先生の太いペンの走りは記憶に鮮明である。公私ともども、数かぎりないご援助とご厚意を賜ったことを想い起こし、天上の先生がこの拙稿を了としてくださいますように。